

佳作

熊本大地震

僕の周囲の記録

熊本大学教育学部附属中学校 二年

大江 祥生

僕は、夏休みに入った最初の日の早朝、カメラを持って母と一緒に出かけた。目的は、宿題で写真を撮るためだった。

「宿題のため」というのは、嘘ではない。ただ、僕はいつも登下校のバスの窓から見ている風景を近くで見たいという気持ちが強かった。

ロープが張ってあるギリギリの所から、あらためて見てみる。この二か月あまり、毎日のように目にしていた風景だが、呆然とする。

気を取り直して、デジタルカメラのファインダーから覗いてみる。

早い時間にも関わらず、僕の脇で何人かの人が、携帯電話で僕と同じ風景を撮影しようとしている。早朝の散歩に来たと思われる地元の人、近くのホテルから散歩に来たらしい中国語や韓国語を話す人。

僕が撮影しようとしていたのは、熊本城の石垣が大きく崩れ、神社の社殿を押しつぶしている場所だった。

熊本大地震が起こる前は、このあたりには堂々とした石垣が立っていた。黒く大きな石を組み合わせ、振り返った美しい曲線を描いていた。

地震であちらこちら大きく崩れ、えぐれたようになってしまった石垣には以前のようなどっしりとした威厳はなくなり、哀しげな佇まいしか残っていなかった。

ファインダー越しに覗いた風景は妙に現実感がなく、ファインダーから目を外して見たら、元の姿の石垣がそこに建っているのではないかと錯覚した。

熊本地震の事もそうだ。たった数か月前の事なのに、

自分で体験した事なのに、記憶が不思議と曖昧である。たぶん、半年・一年たったら、僕は余り思い出せないかもしれないと思う。

この機会に、あの日どんな事が起こって、僕がどうしたのか、どう感じたのかを記録しておきたいと思う。

僕の家は、熊本市の中心部にあり、周りにはオフィスビルが多い。その四階建ての鉄筋コンクリートのビルである。

一階は、母の実家の会社のスペース。

二階が応接室とキッチン付きのリビング。ここで、僕と母は夕食を食べる。昼間は、二階には、祖父の仕事の関係で、来客が多い。

三階は僕と母の生活スペースである。僕の部屋や母の部屋、僕たち世帯の風呂場や洗面所がある。

四階は祖父母世帯になっていて、祖父・祖母それぞれの書斎スペースや寝室、キッチン、風呂場がある。

一階から四階まではエレベーターがあり、裏に階段があるが、普段はエレベーターを使用している。四階から

は階段で屋根裏に上がることができ、半分がサンルーム、もう半分が書庫になっている。

前震が起こった四月十四日、僕は学校から帰ってきた後、三階で午後七時ごろに入浴し、パジャマに着替えたと思う。正直、この記憶ははっきりしていない。いつも通りだったからだ。

その後、いつものように午後八時に二階へ移動して夕食を食べた。食事中には母と

「十六日にある部活の試合、天気が良ければいいね。」という話をしたような気がする。

食事の後、午後九時ごろに勉強をするために、僕は母より先に三階にある自室へと移動した。

そして、午後九時二十六分に震度五強の地震が発生した。

とても激しく横に揺れ、僕はまるでテーブルクロス引きでテーブルの上に乗っている皿やグラスになったような感じがした。

普段、自室と三階のリビングの間のドアは開けっぱな

しにしている。気が付くと、振動でドアが閉まりそうになっていた。特に何かを考えた訳ではないが、とっさに走ってドアが閉まらないようにした。そして、リビングに逃げた。

僕の部屋の本棚には、あまり本が入っていなかった。春休みに一年生の時の教科書や問題集を別の場所にある本棚に移し、よく使う教科書類を入れるようにスペースを空けていた。そして、まだ少ししか新しい教科書や問題集をもらっていなかったからだ。

そのため、スカスカの本棚から、本や表紙がツルツルで滑りやすいファイル類が降ってきた。

それに、三階のリビングには背の高い家具を置いておらず、頑丈な大きなテーブルがあるので、安全だ。

部屋から出た瞬間、エレベーターから降りたばかりの母がいた。

二階で夕食の片づけをしており、まだ途中だったが何故だか急に三階に上がってきたようだ。

後で考えると、この時、母がエレベーターに乗るのが

三十秒遅かったら閉じ込められていたかもしれない。また、母が三階に上がろうとしていなかったら、しばらく僕は三階でひとりきりになってしまい、どうしてよいかわからなかったかもしれない。

揺れが落ち着いて、すぐ、テレビをつけた。震度の情報も流れていたが、詳しい被害状況はまだわからないようだった。

停電にはならなかった。

母に言われて、洗面所で、問題なく水が流れるか確認した。水道のレバーをお湯にすると、お湯が出たので、ガスも問題なさそうだった。

その後、母が

「急いで、風呂桶に水を溜めなさい！」と言った。僕は何故だろうと思った。

「とにかく、急いで！」

と母は言った。僕が風呂桶に水を溜めはじめると、母が今は水が出ていても、これから止まる可能性があるの、トイレを流す水を確保するために、水を溜めておく必要

があると説明してくれた。

それから、いつでも避難が出来るようにパジャマから洋服に着替えた。そして、スリッパからスニーカーに履き替えた。たまたま僕も母も洗ったきれいな外履き用の靴を三階に置いていた。

また、すぐに持ち出すため、保険証、懐中電灯、ラジオ、飲み物、携帯食、財布など最低限必要なものをかばんに詰めた。

後日、テレビを見たときに保険証を失くした人のための説明が流れており、保険証というのは本当に大事なのだと思った。

靴をはいた後には祖父母の安否を確認するため、裏の階段に出て四階に向けて叫んだ。すると、祖母が元気な声で返事をしてくれて祖父母の安全が確認でき、ひとまぜほっとした。

それから、僕と母で階段をあがって四階へ行った。四階のドアの前は荷物が散乱して歩きづらかった。母が以前から

「階段に物を置かないように。」

と祖母に言っているのを聞いていたので、こういう事なのだと思った。

四階に行くと、テレビが倒れたり、本が散乱していたりしていた。

三階と同じテレビなのに倒れていたもので、三階より四階のほうが揺れたのかもしれないと思った。

祖父母と少し話をしてから、また階段で三階へおりて片づけをすることにした。

片付けの最中、二十三時に学校から連絡メールが来た。十五日の午前十一時まで自宅待機ということだった。

連絡メール以外にも、母の熊本や全国の友人から安否確認のメールやSNSが入り、母の携帯はなりつばなしの状態だった。

母が親戚に連絡をとろうとLINEをひらくと地震が起こる前の八時半に四月十六日の試合について連絡が来ていた。母が返事と一緒に部活の保護者に

「大丈夫ですか？」

と、メッセージを送ると次々と返事がきた。マンションの上に住んでいる人は揺れが酷かったそうだ。まだこの時間は塾にいる友達もいたようだった。

学校の連絡メールは学年末に情報がすべて消去されるそうで、新年度のメールアドレス登録は始まったばかりだった。母がきちんと登録をしてくれておいてよかった。

不思議なことに、携帯は呼び出し音が鳴らないのに留守電が入っていたり、鳴っても出る前に切れてしまったりとつながりにくくLINEやFacebookのメッセージ機能の通話が安定してつながっていた。

そして、三階の片づけが終わると二階へ行った。二階はほとんど被害が無かった。ペットのトイプードルは怯えて狭い所に入り込んでいた。僕に気が付いたが、いつもなら尻尾を振りながら走ってくるのに、その時はおそるおそる近づいてきた。

この日は一時間半ほどで片づけが終わり、二十時半頃に洋服のまま、靴を足元に置いて母と同じ部屋で就寝した。

片づけをしていて、常日頃から防災意識を持っておくことは重要なのだなと痛感した。部屋によって全く被害状況が違っていたからだ。僕たちの世帯は母が地震のことを考え、気を付けて家具を配置していたので比較的片づけが楽だった。

寝る時間は遅かったが、翌朝、十五日はいつもと同じ午前五時ごろに起きた。起きたら何故かサイドデスクにクッキーとラスクが置いてあったので母にどうしたのか尋ねると、午前四時頃に近所のコンビニエンスストアで買ってきたという事だった。

僕が寝ていた間に起こったことを母に教えてもらった。

午前零時十分に学校から十五日は休校という連絡メールがあった。

午前二時五十分にニューヨークに住んでいる母の従妹（祖母方）からFacebookで安否確認の連絡があった。電話がつながりにくいので、大牟田に住む祖母の妹には、この母の従妹がニューヨークから大牟田へ連絡

してくれることになった。

午前四時ごろに母は近所のコンビニへ、食料類を買いに行った。顔見知りの留学生のアルバイトの人がお酒のビンが割れてしまい、片づけが大変だったという話をしていたそう。お店には、カップ麺、弁当、プリンやゼリーなどの食料品は売れてしまっただけで残っておらず、ほんの少しのクッキーやラスクなどしか残っていない状態だった。

僕が起きてあまり時間がたたないうちに熊本県警察本部からゆっぴー安心メール「地震発生に伴う交通規制等について」が届いた。道路にも被害があったようで、困ったことになったと感じた。

その後、母が買ってきたラスク・クッキー類を食べた。まだ余震が続いていたので安全のため、IH調理器具やお湯は使わないほうがいいだろうということになった。朝ごはんは温かいごはんが食べられないことはまずないことなのでとてもつらかった。

その後は、午前九時に学校の連絡メール「大地震に伴

う安否確認」が届いたので指示に従ってアンケートに答えた。

昨夜溜めたお風呂の水は、溜めたときにはきれいに見えたが、一晩おくと風呂桶の底にうっすらと鉄さびのようなものが沈殿していた。それで、水を溜めなおすことにした。

また、僕たち世帯の麦茶を作るポットを全部出して水を入れて、冷蔵庫で冷やして飲料水を確認することにした。

これらのことをしながらテレビを見ていた。益城の酷い被害状況が映っていた。僕の家の周辺にも被害はあると聞いたが、テレビに映っていた益城の様子とはあまりにも違ったので現実味が湧かなかった。

お昼の十二時頃には昼食を食べた。ひとまず余震が落ち着いていたので母がエビチリを作ってくれた。地震後にはクッキーやラスクなど買ったものしか食べられていなかったのも温かいご飯とおかず、サラダ、スープが食べられたことは本当にうれしかった。

昼食を食べた後は、母が今後の余震に備えておくべきだと言ったので冷蔵庫の中に入れていた野菜を解凍するだけで食べられるようにホームフリージングする作業を手伝った。

キャベツは僕の好きなコールスローサラダを作りやすくするために、丸のまま洗い、スライサーで千切りにしてからそのままチャック付きのふくろに詰めて冷凍した。解凍して食べた時には普通のキャベツよりシャキシャキした食感はなかったものの、普通のキャベツよりしつとりしていてコールスローにして食べるととても食べやすかった。

山羊は土を洗って落とし、皮をむき、すりおろし器でとろろにしてパック詰めし、冷凍した。ねばねばしていたのでパック詰めするときにムラが出ないようにするのがとても大変だった。

ほうれん草はお浸しにするためにゆでて水を切り、包丁でカットしてパック詰めし、冷凍した。

アスパラガスはそのまま食べるためにほうれん草と同

じようにゆで、一口サイズに切ってパック詰めし、冷凍した。

トマトはへたを取って丸のままパック詰めし、冷凍した。解凍すると皮がむけやすくなっていた。二個入れるとちようど袋がいっぱいになるぐらいのサイズで高さもあったため、つぶさないように入れるのがとても大変だった。

白菜は汁物に使うためにゆで、細かく切ってパック詰めした。

それからご飯を炊き、冷凍した。

この時は、まさか十四日の地震が前震でこの後本震が来るとは思っていなかったが野菜やご飯を冷凍していて本当に良かったと思う。

午後四時二十五分連絡メールで「四月十八日(月)の登校及び時間割について」が来た。それによると、四月十八日から学校が再開するという事だった。

午後七時には浴槽に溜めていた水をいったん抜いて入浴し、また水を溜めなおした。入浴後はパジャマではな

く洋服に着替えた。

そして、午後八時には夕食を食べた。温かいご飯が食べられたのでとてもほっとした。

疲れたので午後九時には就寝した。

僕は十六日未明の午前一時二十分頃にトイレに行きたくなり、トイレに行った。

手を洗って丁度手を拭き終わった時に熊本大地震の本震が発生した。平成二十八年四月十六日一時二十五分、中央区では震度が六強だった。

トイレから出たところには落ちるような物があまりなく、ひとまずそこでしゃがんで頭を守った。大きな揺れがおさまってからはすぐに母のいる寢室へ戻った。歩ける程度だが、揺れは続いていた。

部屋はめちゃくちゃで前震の時よりもひどく荒れていた。また、停電にもなってしまい、あたりは真っ暗だった。

持ち出し用の荷物を持ち、三階より安全だと思われる二階の応接室に母と二人で移った。そして、荷物の中の

ラジオを出し地震情報を聴きながら電気の復旧を待っていた。

待っている間も一時半に震度四、一時四十四分に震度五弱、一時四十六分に震度六弱の余震が来るなど非常に激しい揺れが続いていた。

母は前日に親戚への連絡ルートを作っていたので祖父方一人にLINE、祖母方一人にFacebookメッセージを送るだけで良かった。

午前三時過ぎに部活の保護者のグループで安否確認のLINEが送られてきた。確認できる範囲では部活生とその保護者は全員無事だった。しかし、学校の近くのマンションの一階部分がつぶれてしまったという情報がきてびっくりした。

その他の仲のいい友達のお母さんからも母の携帯に連絡が来て、無事であることが確認できたのでうれしかった。

母は自分の状態をFacebookにあげていた。それから二時間ほどして電気が復旧し、とてもほっと

した気分になった。初めて、電気がつくことはとても安心できる事なのだと感じた。

蛇口をひねってみたが、最初はチョロチョロと水が出たものの、少しすると出なくなってしまった。

母から溜めた水を使ってトイレを流す方法を教えてもらった。水洗トイレは水道が使えないと流せないと思っていたので、とても意外だった。

二階の食器棚は作りつけになっていて、耐震ハッチもついていたので二階の被害はテレビが倒れたこと以外にはさほどなさそうに見えた。

ただ、テレビが倒れた時に配線のプラグが抜けてしまい、先が破損してしまったようでテレビを見る事が出来ない状態になってしまっていた。ラジオはなるべく電池をとっておきたいので出来ればテレビから情報を手に入れたいがそれが出来ず、飼犬も寝るときに入れる丈夫なケージに入っていて安全を確保できているので二階の片づけはとりあえずせずに、三階に上がった。

三階のテレビは倒れていなかっただったので、すぐにつけた。

アナウンサーが

「落ち着いて行動してください。」

と、必死に呼びかけていた。被害状況はまだはっきりとはわかっていないようだが、緊迫した状況は伝わってきた。

今回も裏の階段から四階に向かって叫び、祖父母の安否を確認した。

母が片付けをしている一階から三階の階段は通れる状況になっていたが、四階の階段は物が落ちてきていて通れる状態ではなかったので顔を見るのはあきらめた。

四階の階段から火鉢用の灰が三階の階段の踊り場に降ってきて、こぼれた洗剤に混じってドロドロになっていた。まっていた。

一昨日片づけたのに、さらに酷い状態を片づけなければならぬと思うと、げんなりしてしまった。

ひとまず寝ることができる状況を作るために寝室の片づけをした。寝室は、ラックが倒れたりCD-ROMやファイル類がベッドの上に落ちたりしてしまっていた。

前震ではほとんど物は落ちておらず、ラックも倒れていなかったが、本震では倒れてしまっており、地震の恐ろしさを再認識した。

まず倒れていたラックを起こし、それから落ちたものをラックの上に戻していった。

落ちた量自体は多かったものの、壊れたものではなく、比較的スムーズに片付けが進んだ。

片付けには大体一時間ほどかかり、終わったのは午前四時頃だった。その後はかなり疲れていたので僕はすぐに寝た。

翌日は午前七時頃に起きた。

寝ている間に起こったことを母に聞いた。

母は、僕が寝ている間に家の片づけを進めていた。

SNSを見ると、デマと思われる情報も多く流れているので注意が必要だと母が話してくれた。

向かいのマンションで一人暮らしをしている母の後輩が、非常ベルが鳴りやまないので近くの学校に避難していたが、毛布の数が足りずに寒くて、座るのがつらかつ

たが、徒歩で三十分かかる実家に帰ることは危険だと判断したということをFacebookに書いていた。

それを母が見て、家には食べ物も水もたっぷりあるからおいでと言ったところ、三階と四階の間の階段の片づけを手伝ってくれて、階段で四階から一階まで通れるようになった。

四階に行くと、母の後輩に、お礼にコーヒーをいれると言って、祖父がアルコールランプに火をつけようとしていた。それを見て、震度四以上の余震が続いているのにアルコールランプに火をつけるのは危ないと祖母と母が怒っていた。その様子を見て、地震の時はいつもしていることでも慎重にしなければならないのだなと思った。

その後、母が僕と後輩に朝食を出した。器にはラップをしき、汚れないようにしてあった。メニューはご飯と解凍した冷凍キャベツにコールスロードレッシングをかいたコールスローサラダ、電子レンジでできる唐揚げと冷凍ごはんをレンジで解凍したごはんだった。

シンプルだが、その後輩は喜んで食べていた。

その様子を見て、温かいごはんを食べられるということはとても大事な事なのだなと思った。

朝になって外を見たら斜め向かいのビルが大きく壊れていてびっくりした。外壁が落ちてくるので側を通れない状態になっていた。

大して被害が無いと思っていた自分の家も良く見ると少し被害が出ていた。

二階と四階で作りつけのキッチン収納の耐震ハッチの同じところが壊れていた。観音開きの部分が耐震機能で開かなかったので、中の物は無事だったが、耐震ハッチの金具が壊れていた。

二階の重いアンプライトのピアノも少し動いていた。隣の敷地との間の塀もひびが入っていた。

それを見て、僕は地震のエネルギーはすごいと思った。母は被害の申請のために被害の状況を写真に撮っていた。十六日と十七日は、家の片づけに追われて過ごした。

ペットボトルのお茶と水は母がたくさん買い置きして

いたが、念のために近くの自動販売機を見てきた。お茶や水は売り切れていたがコーラなどは残っていた。コンビニも全て閉まっていた。

四月十八日(月)にはガス会社の人が来て、ガスが閉栓された。

ガス栓の開閉は自宅で出来るものと知らなかったので驚いた。

また、アレルギーが酷くなって皮膚がかゆくなってきたので、前日から営業を始めた上熊本駅の方角にある温泉に歩いて行った。

この日は、線路の点検のため、路面電車はまだ復旧していなかった。

温泉までの二キロちょっとの道は、車がとても渋滞していて、ずっとつながっているような状態だった。家から上熊本と反対方向に一キロ弱の場所にある市役所へ給水に行く車の列だった。

途中の道で見かける建物は全く被害がないものから全

壊に近いものまであって、なんでこんなに差があるのだろうと思った。

歩道にあるゴミステーションは、災害ゴミであふれ、通れないところもあった。

二日ぶりにゆっくりお風呂に入れたのでとてもリラックスできた。僕は普段からお風呂が大好きで、お風呂でリラックスをしている。お風呂というのは、体を清潔に保つだけでなく、精神的にもとても良いものだと思わなくてはならなかった。

帰ってから、塗り薬を塗ったら少しかゆみがおさまった。

四月十九日には、生協とヨシケイ（作りたいメニューの食材一式が届くサービス）の配達が再開された。

スーパーがまだあまり営業しておらず、営業しているスーパーも品薄の状態で食材が手に入りにくい状況だった。材料がなくて家のご飯が食べられなくなったらどうしようと不安になっていたので、食材が手に入ってとても嬉しかった。

病院もまだ診察が再開できないところも多かった。皮膚科が休診だったので、母の幼馴染の外科内科のかかりつけ医に相談したところ、在庫がある薬は処方してくれるということだったので、家から五百メートルぐらいの病院へ行った。

病院は、二階が入れない状態になっていて、一階で先生が問診をしていた。

熊本のメインの商店街は、一キロほどアーケードが続いている。病院は、その繁華街の端に位置している。問診をしていたら、怪しい人がすーっと病院の中へ入ろうとしたので、先生があわてて声をかけた。先生の話によると、他県から来た窃盗を目的とする人たちが繁華街でうろろろしているという事だった。

先生が診療の準備で少し席を外さなければならなくなり、先生に頼まれて、関係の無い人が行ってこないように椅子を入口に持って行ってしばらく門番をした。

先生は、午後から避難所にボランティアに行き、診療をすると言っていた。いろんな人がそれぞれ出来ること

をしている。医療関係の人や生協の人、商店も被災しているが、それぞれが出来る仕事を頑張っていた。一方、窃盗団も来ている。うまく言えないが、もやもやした気持ちになった。

夕方から新町の銭湯へ行った。住所・氏名・被災状況を記入すると無料で入浴出来るように市が手配した銭湯だった。

並んでいても時間が来たら閉店するという事だった。たくさんの方が並んでいたのに入れるかどうか不安だった。ただ、男湯は早く、僕が銭湯から出た時、母はまだ列の後ろに並んでいたの僕は先に帰ることにした。

僕が家に帰った後 i P h o n e が地震予報のサイレンを鳴らした。

前震から六日目、地震予報のサイレンの音はもう何度も聞いていて、鳴ったらすぐ頭を守ることが出来るようになった。家に帰ってから良かったと思っただ。

母は銭湯の脱衣場を出ようとしている時に鳴ったそう。で、銭湯に来ている人の携帯が一斉にサイレンを鳴らし、

凄いい状態だったそうだ。

日付が変わって四月二十日（水）夜中の二時ごろに母が蛇口をひねると水が出始めた。それで、母に起こされて手伝うことになった。お風呂に溜めていたトイレ用の水は水位が半分ぐらいになっていた。また、風呂桶の底には鉄さびが沈殿し、水も臭くなってしまっていた。

僕はお風呂が大事なので風呂桶が悪くなってしまうのではないかととても心配だった。

それで、急いで水を抜いて風呂桶の掃除をし、水を溜めなおした。

その後、水圧の高い一階で手洗いで洗濯をした。家の洗濯機はドラム式の全自動洗濯乾燥機で少しの水では運転できない。また、乾燥機能も水がないと使えないタイプなので脱水機能だけを使って干した。

日中は水圧が下がるため水道は出なくなっていました。前日に電車が動き始めたので、温泉には市電で行くことができた。電車はダイヤが乱れていていつ来るかわからなかったが、それでも電車が通ってよかったです。

四月二十・二十一・二十二日は、未明に起きて洗濯をし、朝ごはんを食べ、電車で温泉へ行って帰ってからは片付けをして過ごした。

普段なら洗濯はスイッチを押せばいい。お風呂も二十分もあれば済む。しかし、今は洗濯は自分の手でしなければならぬし、温泉に行くのにも往復だけで四十分以上かかり、一時間以上並ばなければ入れない。一つ一つの事をするのにとても時間がかかり、未明に起きなければならぬこともある、とても疲れた。

四月二十三日（土）はいつものように温泉に行き、帰りに電停で電車を待っていると、他県の名称が入った災害救難用の車や消防車がたくさん通った。

四月二十四日（日）、そろそろガスの開栓がおこなわれ、家でお風呂に入れる家庭が増えてきたようで、温泉に並んでいる人の数がだんだん減ってきた。家はまだ水がちよろちよろしか出ず、ガスの開栓もまだなのでいつになったら家でお風呂に入れるのだろうかともどかしい思いを抱いた。

日付が変わって四月二十五日（月）の未明、洗濯をしようと水を出すと、勢いがあつたので洗濯機を運転してみたら動いた。それで、夜中にもう一度寝ることができた。安心してゆっくり眠ることができた。

上の階でも水を出してみると、二階ではうんぐらいの太さの水が出た。三階では、いつもより量は少ないが手を洗うことが出来た。ただ、四階では日中になるとやはり出なくなってしまう。

温泉に行く準備をしていると福岡から応援に来たというガス会社の人がガスを確認して開栓してくれた。

夕方になると、水圧が上がってきて二階ではほぼ元通り、三階は、いつもより水圧は低いものの、シャワーを浴びられるほどの水圧になってきた。そして、十日ぶりに家でお風呂に入ることが出来た。温泉に行つてはいたが、自宅では周りの人を気にせずゆっくり入ることができ、何よりも洋服やタオルを準備する必要がないのでとても安心しリラックスして入ることが出来た。

四月二十六日（火）、洗濯機で洗濯ができ、食洗機も

使えるようになり、安心して食器を洗えるようになった。また、家でゆっくりお風呂に入れる生活に戻った。それで、十四日以来久しぶりに机に向かって勉強した。地震の片づけで勉強が出来ない間も勉強のことが頭の片隅に引っかかっていたが、ようやく落ち着けた気がした。

振り返ってみると、水・電気・ガスといったライフラインの停止は不便というだけではなく、必要になる時間からくる疲れや精神的な疲れも相当きつかった。洗濯をするのにしても一日分の服を手洗いすると二十分近くかかったりご飯を食べるにしても器にラップをかけてから食べないといけないので満足してご飯を食べられなかった。

やはり、ライフラインは普通に生活するためにとても重要なのだと思った。

僕は、幸い避難所に避難したり車中泊したりする必要がなく、水や食料を求めて長時間並ぶ必要もなかった。

被災した熊本の人の中でも恵まれた環境にあつたと思う。避難所や車中泊、長い待ち時間など激しく疲れる要

因があまりなく、体力もお年寄りの方や病気の方、小学生の人などよりはあつたが、それでもとてもきつかった。そのような人たちはとてもきつかったのだらうなと思う。

地震は起こらないのいいが、どうしても起こってしまう。この熊本大地震では阪神・淡路大地震や東日本大震災などの経験によつて被害が減ったり生活の助けになつたりすることがとてもよくあつたと思う。

ぼくはまだ中学生で何が出来るかはおわからないが、この記録を通して、自分に何が出来るかを考えていきたい。

この文章を書いている今、熊本大地震から四か月が経っている。毎日の生活の中で熊本城を目にする。武者返しの美しい石垣、下から見上げると思わず歓声が漏れてしまう壮大な天守閣。いつ元通りの姿に戻せるのだらうかと、不安と期待の感情を行ったり来たりしている。